短歌　渡邊順三選

入選第一位

三川　樫本国義

枠幾つ倒されてゆく落盤の激しき音にひと日怯えつ
落盤の頻りに起る旧坑を身近かにひと日石炭掘り続く
落盤の激しき音に炭塵は終端柱を越えて舞いたつ
天盤の亀裂の早き切羽にて懼れつつ常に曝す命か
資本家の搾取露骨と憤る貧しき位置に励まし合いて
落盤の恐怖は堪えず身にまとうキャップランプの光茫の中

入選第二位

製作　藤本盛登

残業パン盗りし疑いうけし夜の星は妖しきまでに輝く
失業せば如何なる職につかむかと思いつつ見る新聞求人欄
鋼鉄の熔けゆく匂い感じつつ電気爐の傍に鋳型を作る
熔鉄のにおいに親しみて十八年優越感もち鋳型作りぬ
暮れ方の街に風鈴売りている老人の声意外に若し
被爆せし体験語り居る吾に友らのまなこ真剣となる

入選第三位

製作　永松運造

怠惰なる吾かとひとり歩みゆく日ざかりの道に向日葵咲きぬ
拳もて汗おしぬぐいつ氷噛む少年工は兄弟をもたず
ヤスリより削り落ちゆく鉄粉がもるる陽射しの中にかがやく
汚職あり基地反対に血を流すありいずれも忘れがたくまた忘れむとす
デモ隊の駈けゆく後にのこされし病癒えたるわれと吾がかげ
のこりいる疲れを感じうたたねの畳より背中はぎて起きたり

佳作

宮浦　中西長輝

朝づく陽窓にさし込む職場にてしみじみとわれはバットを吸えり
山の上に雨乞いの火の燃ゆる夜を火星はあかく瞬きており
山ひとつ彼方は畑かほそぼそと煙のぼれり人居るらしも
夕方の人のすくなき銭湯に久々に来て足をのばしぬ

製作　長谷川正春

とよもせる中気のなかに汗ばみて油にぬれしナットを締むる
悖と思うも寂し手の皮にのこるマシン油を幾度も洗う
わが孤独ひとには告げず甲板にのぼりて立てば汐の香うまし

製作　江上輝廣

中東の急つたえる日々すでに株の値上ることを聞きたり
寝ねがたく起きいる夜をいつまでも田に引く水を揚ぐる音きこゆ
要求にはるかに遠きボーナスの回答掲示の前をはなるる

宮浦　山西光一

あかね雲とぎれて夜に移る頃選炭場にひびく遠きピッケの音
人工島の真下に立てば入る排気肌に冷え冷えと朝の匂いす
鹿築めし夕映え赤き坑事務所われ一人いて保安日誌書く

四山　馬場久元

ツベルクリン陽転したる末の子は母と泳がず海の絵を描く
鉱害にゆがみし墓地の片隅に小さき父の墓標かたむく
妻の背の骨の尖りのいたいたし梅雨も降らずに真夏にはいる

選後に

選三人、佳作五人以内と指定されていたので、私としては残念であつた。本当ならもう四、五人、たとえば岩山、日巻、後藤、松原、山西などの諸君は佳作に入れたいと思つたのである。

全体としてはみな真面目な態度で、自分の生活と取り組んで歌つているのがよい。ただ何人かの人はまだ作歌をはじめて日の浅い人らしく、表現のうえでいろいろ欠点のあるのが目についた。これはしかし少し努力すれば必ず進歩するのである。ただ短歌とはこういうものだという先入的な概念にとらわれていて、自分の言葉で、自分の本当の感情をうたうという大切なことを忘れているのが一番困るのである。つまり歌らしくしようとして、却つて自分の実感から遠くなり、形だけは歌らしくなつても、魂のないつくりものの歌になつてしまうから、読者によつてはつまらない、何の感銘ものこらない作品になつてしまうのだと思う。表現は少々まずくとも、作者の実感のこもつた、真実性のある歌は必ず人の胸にひびくものである。たとえば

折にふれ吾が病状苦しかる一人さまよう荒野ならずや

という歌の「一人さまよう荒野ならずや」というのが、いわゆる歌らしい言葉づかいで、いかにもよさそうにみえるが、これは概念的な表現で、作者の実感ではない。また

忘れられぬ花の色香も思い出のさびしく過ぎて若葉老いゆく

という歌も、やはり歌らしいこしらえもので、どこにも生き生きとした作者の感情がみられない。「花の色香」などというのが先入的な概念でいつているので、実感ではない。

病む人を雪取る術とてなけれども窓の内外に震き晴らすらん
けながくも別れ居すれば夏草のしげくひまなく恋しきものを

これらの歌も全く古い観念でつくられていて、ひどく現代ばなれのした歌である。こういうところを早く脱げだして、自分の言葉で自分の感情で卒直に歌うようにしていただきたい。以下選に洩れたがいいと思つた歌をつぎにあげておく。

三川　向山　浅士

この橋もいつまで通えばわがくらし楽になるかとふりかえりみる

宮浦　山下　益雄

開け放てる目下の鉱山社宅葬寝ころぶが見えミシン踏むが見ゆ
夜を徹し作業終りてぐつたりと友は寝ねおり服をきしまま

三川　竹本　雅子

病院の窓辺に寄りて吾を待つ夫を思いて急きかけゆく

三川　飯　正樹

坑木のへし折れし音ぶきみにて地圧はここに至りたるべし

本所　後藤　香涙

共稼ぎの疲れがぐちとなる妻にただ黙々と忍もんでやる

三作　岩山　光義

生み月も間近かと思う人もいて社宅の主婦のデモ隊がゆく

三川　竹本　昭種

田草かく手を休むれば背にかぎす日除けの木の葉乾く音すも
投げ入れるこの一票が俺達を幸福にせよと入れる一票

宮浦　山西　光一

一函を積込み終えれば汗ばみて吐き出す息の熱気おびたり
天盤に咳ひびかせて交替の友がおもむろに坑降りて来る

三川　中尾　種夫

泥炭え濡り落つる雨に濡れて熱き切羽の亀裂に対す

宮浦　永野　草平

薄給の日々のつとめに吐く溜も
かみたるハナも炭塵にまみるる

これらの歌と、前にあげた「一人さまよう荒野ならずや」以下の歌とをくらべてみて、どういう歌が魂のない死んだ歌か、また実感のこもつた生きた歌かがわかると思う。

◇　◇

さて入選作第一位の樫本君の作品は坑内労働の実態に即して歌つていて力づよいリズムをもつている。落盤におびえて日々作業している作者の不安な感情は読者にもまざまざと感じられる。三首目と六首目がとくにすぐれていると思う。第二位の藤本君の歌もそれぞれ面白い。第一首目はやや特殊な境地で、下句の「星は妖しきまでに輝く」は利いている。四首目の「鋳型作りぬ」は「作り来ぬ」の方がいいかも知れない。十八年も熔鉄の匂いに親しんできた作者の感懐として共感できる。第三位の永松君の第一首目「向日葵咲きぬ」は「咲けり」でどうだろう。この歌は「怠惰なる吾か」という反省と「日ざかりの道」に咲いている「日向葵」との対比でよく気分がでている。二首目は「少年工は兄弟をもたず」で生きている。佳作の中西君の二首目は情景と気分が統一していてすぐれている長谷川君の二首も内面的な深さがあつて、しみじみとした哀感がただよつている。三首目の「のぼりて立てば」はいくらかうるさい感じがする。江上君の一首目中東の緊迫した情勢を「株の値上る」というところでとらえたのはよかつた社会問題や国際情勢などに触れた作品は他にはほとんどなかつた。二首目の「田に引く水を揚ぐる音」も今年の水不足の農村に作者の目が向けられているし、要求したボーナスの問題もとりあげていてこの作者の積極的な態度に注目した。山西君の「あかね雲とぎれて夜に移る」はよく見てとらえている。すぐれた写実なのだ。二首目の上の句は外部の私などにはよく理解できないが「肌に冷え冷えと汐の匂いす」は十分同感できる。馬場君の一首目「母と泳がず海の絵を描く」は、むしろ「海に泳がず海の絵を描く」の方が適切なような気がするし、その方が面白い「母」は父でも姉でもいいわけで安定感がないと思う。

三池だけでもこれだけ歌をつくる人がいるのに組合本部の「月刊炭労」に作品をあまり出さないのは残念である。「月刊炭労」にもぜひ投稿していただきたい。

俳句　栗林一石路選

【入選第一位】　宮浦　山西　青蛙

ふりかぶる祭の花火入坑す

【評】　はるやかな祭のざわめきをよそに入坑する、その目に焼きつくように爆烈する五彩の花火、「ふりかぶる」の一句、全体をおおうて力づよく鮮やかである。

なお同じ作者の

朝顔に一番方のキャハン巻く

も生活のうちにおのずから詩情がにじんでいて佳句である。

【入選第二位】　三川　永野　定一

昇坑り来ておどろく喜雨よ掌にうける

【評】　待ちにまつた干天の慈雨。昇坑したとたんのおどろきとよろこびだ。その掌心のような感動が、じつによくとらえられている。

【入選第三位】　四山（内電）　藤本　凡世

踊り唄炭山の社電は月の中

【評】　非常に単純な表現だが、その大づかみのうちに踊りの夜の炭山の全体を把握して遺憾ない、月夜の社電の灯も見えるようだ。

【佳作】

主婦会（通万町）　竹本　雅子

すど越しに向いの主婦のかいがいしし

【評】　すど越しに向い隣りの生活も見える、いかにも炭山の住宅街らしい。そのすどを透して甲斐々々しくたちはたらく主婦のすがた。そこにも同じ働くもの同志の共感があるだろう。

四山　馬場　久元

坑涼し燈台下に居るという

【評】　いま自分の働いているところは地底ふかく、ちよど燈台の下あたりにあたるだろう。地下にいて、地上とのかかわりをおもうその感情がよく出ている。ただし「坑涼し」はわたしは実際をよく知らないが、たいていの句には「あつし」とか「汗」とかいつているので多少疑問がある。もし季頭に合わせるために「涼し」といつたとしたら安易である。もつとも外の燈台をおもうことで「涼味」を感じたとすればとれないこともないが、それではあまりに心理的な感覚にすぎる。

三川　今田　光義

月見草を褪せし坑夫いく人か亡

【評】　夏の夕べぽつかり咲く月見草、その夢のような花をあいつも、あいつも好きだつた。しかしいく度かの坑内事故で、その仲間のいく人かがもういない。その感傷は、また炭鉱労働者の生活につながる。調子にややゆるみがあるようにみえるが、それもこうした感情の流露として自然なリズムといえよう。

【選外佳作】

三川　永野　定一

入坑（さが）る嶺燈増え来て青し若楓

宮浦内特　山下　益子

縁側に昼寝して居り牛の如

三川主婦会　竹本　雅子

人声を静かに聞けば早苗取り

三川坑電気　宮崎　天馬

子のために嫁かぬと決めし魂祭る

四山　久保田和昭

保育所の七夕笹の小さきこと

四山　馬場　久元

炎天にだまりこくりて昇坑夫

宮浦　中西　長輝

運搬れて蚊柱すこし移りたる

潜務　松原　孤雲

大南瓜門に垂らして鉱夫住む

三川　竹本　昭種

土間くらく牡丹の風の光くる

宮浦　永野　草平

濡りて喜雨の中なる夏みかん

宮浦　前原　真美

坑嶺を正しくかぶり原爆忌

本所　後藤　瑞峰

蟬かえる今生命のつやをもち

宮浦　井手口湖舟

旱天の月赤くあり入坑待つ

三作　森口きよ秋

サングラスかけ平和行進の列に加はる

総評

「炭労」の俳句は全体にしつかりしていて、レベルが高いが、この三池炭鉱の諸君のも相当見ごたえがあつた。しかし選にもれた大多数のものについていえばなお不十分さはまぬがれない。それについてごく大まかにいえば、もつと生活的な、まいにち諸君がはたらいているその生活の中に題材をもとめる努力をしてもらいたい。従来俳句には「季題」というものがあつて、自然風物、それも季題趣味の目を通してのそれを主としてうたい、とかく生活的、現実的なものに目をそらす傾向があつたがこれはもう現代の詩、文学としての態度ではない。自然とともに生活を趣味的な色めがねをかけずに自分の目で見、感動したことをいつわりなく、という句作態度をもつとおしすすめてもらいたい。炭鉱の諸君のように大自然を相手として働く生活ではとくに自然と生活とは別々のものではなく感じられるのではあるまいか。

このような態度で句作にたちむかうとき、当然に題材のつかみかたや、表現のしかたにも、それに応じて作者独自のもの、したがつて類型や、マンネリズムにとらわれない新しさがうまれるであろうこうしてつねに自由で新鮮な俳句をつくるよう心がけていただきたい。

児童つづり方

【入選一位】

雨

宮浦　小学三年　杉江政美

今日も一年生の妹が、「雨雨ふれふれ母さんが　じゃの目でおむかえうれしいな―」と大きな声でうたつている。ぼくはなんだか、このうたをわすれたように、うたうきがしない。毎日毎日ちつとも雨はふらないで、お百姓さんが困るだろうなあ。

先日お母さんが、岡山のおじいちやんに手がみをだして、「田うえはすみましたか」ときかれたら、岡山のほうは、「雨がおおくふつて田うえはもう一カ月まえにすんだ、いまはどんどん稲がのびて、家のまわりは横も後も前も広々とした青田が水をいつぱいたたえてる。山のふもとの水車は、夜も昼も休みなく廻つてるから安心してくれ」と、手がみがきたそうだ。でもぼくたちのすんでる九州は、ことしはなぜこんなにあめがふらないのかとおもうと、ぼくは空をながめて、雨よふれふれどんどんふつてふりまくつてくれと言いたくなる。

僕は毎日お母さんに新聞をよんでもらつて、お百姓さんが田植が出来ないで困つておられると言うことがよくわかる。

この前僕は、雨がさを学校でなくしたので、お母さんに新しいのをかつて貰つた。一日も早く新しい傘をさして学校にゆきたい、でもまあだその傘をさしてゆける日が来ない。その日は何時になるだろうかと空をながめたくなる。

【評】　子供の作品としては、めづらしい社会的なひろがりをもつている。雨によせる庶民的なねがいもたのもしい。